

## 言語設定(京の言葉)

### アクセント

アクセントは常に penultimate に来る。アクセントの吹き飛ばしにより複合語であるか否かが明確なので、N2-N1 で「N1なN2」が作れる。同種のNを並べた場合は並列とも取れるが、生産的ではない。

### onset

p	t		k
b	d		g
f	s, ts		h
	r	y	
m	n		

ゼロオンセットは語頭のみ可能である。e は語頭であっても常に y- を伴う。yi は、たとえばdohi「あなた」に対応する南の下層の言葉 noi を京でも使うことがあるが、そのときの noyi などに現れる。

si → hi, tsi → ti


### 母音

a, e, i, o の4種。長短は対立しない。falling な二重母音は持たない。

### coda

-M, -N, -s がある。鼻音要素は -M と -N があり、直後に母音が来たときはそれぞれ m や n として現れる。そうでなければ合流し、直後の子音に合わせて変化する。基本的に直後の子音と同一の調音点を持つ鼻音になる。ここでは、慣習に従い、p, b, f, m の前では m で綴り、それ以外の子音の前では n で綴るものとする。鼻音要素は語末では消失し(ただし単音節の機能語を除く)、r の前に来ると融合して -rr- となる(現代の京の言葉では rr の発音は r と同じである)。鼻音要素は s の前に来ると融合して -nts- となる。他には、摩擦音コーダ -s がある。これは h の前では融合して -hh- となり(現代の京の言葉では hh の発音は h と同じである)、また b, d, g および p の前には現れることがない。

### 語彙

 語彙

## 統語論

語順はV-final。後置詞がメインだが、接頭辞もけっこうある。  
格を表す後置詞は以下の通り。

～から離れて	sesti	名詞・場所詞の後に置いて場所詞を作る。
～に向かって	yã, yami	名詞・場所詞の後に置いて場所詞を作る。yã はアクセントを持つので、直後の子音の影響も受けるけれども続け書きしない。
～の	tse	直前に名詞を、直後に名詞・場所詞を取る。 数詞A + 名詞C + tse + 数詞B + 名詞C で「A個のCのうち、B個のC」の意味になる。
～を	ha	ただし、「これを」はhomi。
～と	hemi, hen-	hen- はアクセントを持たず、直後の子音の影響も受けるので、直後の語と続け書きする。
～も	ma	1. 名詞の後ろに付けて、「～についても、そうである」を表す。 2. 名詞を列挙した最後に置いて、名詞を並列に列挙していることを表す。「A, B, Cが」にも「A, B, Cを」にも用いるので、ma と ha を併用することはできない。2つのものを列挙するときには、「A, B ma」「A hemi B」「A hemi B ma」のどれも許される。  -ate yadi などの -ate は形式上は体言なので、ma を用いることができるが、hemi は用いない。
列挙した全体	mahiya	名詞を列挙した最後に置いて、「AとBとCが」(たとえば、AとBだけではダメ)という意味を表す。
～が	∅	主格は無標。コピュラ文は主格を2つ並べて作るが、コピュラ文に接続助詞を付けるときには存在動詞 hi「ある」で代用する。本来の存在動詞 hi は名詞1個または名詞1個と場所詞1個を取る。

「～の下で、～との影響下で」は ga との複合語で構成する。「神の下で」gapamo のように前置されるということに注意。

動詞の基本の形は常に -i で終わる。母音始まりの補助動詞(-egori「どうやら～のようだ」、-ate yadi「～しない」、-ate nosehi「～できない」)が結合するとこの -i は落ちる。その際、

- 本来的に -si であるものが -hi になっているだけの場合(hi「ある」、nosehi「できない」など)であれば本来の s に戻る
- 本来的に -hi である場合(parihi「話す」、rehi「使う」など)は h のまま
- 本来的に -tsi であるものが -ti になっているだけの場合(bati「来る」など)であれば本来の ts に戻る

場所詞は場所の表現を作り、動詞の動作にまつわる。

数詞は単立して名詞を前置修飾する。名詞化接辞にくつつくこともできる。なお santsate「無、ゼロ個」は名詞なので、名詞を修飾するときには tse が必要である。

## 言語設定(南の下層の言葉)

京の言葉との違いに絞って言及する。

- ・有声破裂と無声破裂の対立がほぼ消滅している。
- ・アクセントのある a が o に合流しがち
- ・アクセントのない e が i に合流しがち
- ・アクセントのない o は [u] と読まれる。それによって生じた [u] にアクセント移動でアクセントが載るケースもたまにある。
- ・語頭 e が ye に吸収されていない
- ・語中 -y-, -f-, -h- がしばしば脱落し、前後の母音が融合することで長母音が生まれる。
- ・語末に長母音があればそこが下降調。
- ・アクセントの後の -st- は -h- になる
- ・語頭の d- は n- に、g- は k- に吸収される。f- は h- になることもあるが多くは保たれる。
- ・-rr- は綴り通り長く読まれる。

## 言語設定(南の上層の言葉)

京の言葉との違いに絞って言及する。

- ・-s- の後の -t- は -h- で反映する。

## -mi 動詞

京ではこれは単立の動詞としては振る舞わず、直前の要素とくつついて単一語としての挙動を示す。一方、南では mi の直前の単語がアクセントを保つ。

カタカナ	京の言葉	南上流	南下層	分析	語義
メヒガミ	mehiga <u>mi</u>	mihiga <u>mi</u>	miiga <u>mi</u>	mehiga-mi	注視する
メヒガスミ	mehiga <u>s</u> mi	mihiga <u>himi</u>	miiga <u>himi</u>	mehiga-s-mi	注視される
メヒガミヤ	mehiga <u>mi</u> ya	mihiga <u>me</u> ya	miiga <u>ma</u> a	mehiga-mi-ya	注意した
メヒガスミヤ	mehiga <u>s</u> miya	mihiga <u>hime</u> ya	miiga <u>ha</u> maa	mehiga-s-mi-ya	注意された

京においては、mi の直前が鼻音要素である場合がある。そのときは、京においても受動の -s- が -i- を伴い、-Nsi- > -Ntsi- > -nti- となる。

カタカナ	京の言葉	南上流	南下層	分析	語義
------	------	-----	-----	----	----

ファランミ	faram <u>mi</u>	fara <u>mi</u>	(用いない)	faraN-mi	掘る
ファランティ ミ	farant <u>imi</u>	fara <u>himi</u>	(用いない)	faraN-si-mi	掘られる